

## 組織行動研究

# No. 23

編集後記にかえて

本文の考察でも述べたことであるが、調査を施行する前に、一般的に考えたこととくらべて、いざ実際にやってみると、いろいろ問題がでてきた。それらについては、既に、考察で述べたのでくりかえさない。ここでは SCT の調査について感想を述べてみたい。

SCT というのは、投影法の中では比較的、便利で、手軽な道具である。そして、我々は、既に、モラル・サーベイ、態度調査、消費者行動などの調査にも使用した経験があり、これを質問紙に加えることによって、より深く、突込んだ調査が可能であろうと考えた。そして、面接も加え 3 本立の質量二面作戦を考えたわけである。その結果は、まあ期待通りの

成果を得ることができた。

併し、“予想外”というより、著者の観測が甘かったというべきであろうが、(もっとも、予測が正しかったら、SCT を施行する勇気は持てなかったかもしれないが) SCT 調査の整理・評価に膨大な時間とエネルギーをとられてしまった。10 数人の専門家が従事したわけであるが、それで、殆んど 1 年半かかってしまった。そのために、本報告書も 1 年おくらせてしまった次第である。何が、そんなに大変だったのか。その点を少し説明させて欲しいということである。

SCT は目的に応じて、いろいろな使い方ができるので、整理・評価にも、別に画一的な方法があるわけではない。

ここでは本調査でやった二つの評価方法について述べる。

一つはタテの評価である。これは SCT 60 文全部に眼を通してトータル・パーソナリティをスケッチするやり方である。これが通常の評価方法であるが、SCT 評価に習熟した人でないと、一寸、困難である。併し、我々のグループには SCT 評価が可能なメンバーが 10 数名参加していた。従って、簡単というわけではないが、可能であった。

もう一つは、ヨコの評価である。これは、例えば「私の父」という刺激語に対する反応から、父

に対する態度を見ようというものである。そして、それが、性、年齢、学歴、地域などによって、どのようになっているかをみようというものである。そうすれば、一応、質問紙とも対応がつけられる。併し、そのためには、「私の父」という刺激語にどんな反応が現われるかを書き抜いて評価のための基準書をつくる必要がある。そして、そのためには、膨大な反応を整理して、内容分析(いわゆる KJ 法)をする必要がある。これは反応を公共的、帰納的に整理するためには必要なステップであるが、時間とエネルギーを要する甚だ疲れる作業である。この作業を 30 刺激語について行い、基準書をつくり、それに則って評価をするのに 1 年半かかってしまったということである。

但し、この基準書は、基本的には今後ずっと使用できるものであるから(そうでなければ、比較もできない)、この調査を行う上では貴重な財産である。

この他にも、今回の調査から学んだことは多い。これらの経験を生かせば、今後は、もっとスマートにやれると期待している。

この調査に皆で悪戦苦闘したグループのメンバーに本当に御苦労様でしたと御礼を述べて筆を置く次第である。

(榎田)

慶應義塾大学産業研究所社会心理学班研究モノグラフ

組織行動研究 (第23号)

責任編集 榎田 仁・南 隆男

KEIO STUDIES ON  
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND  
HUMAN PERFORMANCE No. 23  
MARCH 1993

〒108 東京都港区三田 2-15-45  
発行 慶應義塾大学産業研究所  
電話 03-(3453)-5640 (直通)  
<平成5年3月28日>

〒104 東京都新宿区高田馬場 3-8-8  
印刷 株式会社 国際文献印刷社  
電話 03-(3362)-9741 (代表)  
<平成5年3月21日>